

い。著者はその結論の章で、一度はさまざまに ambivalent な様相を列挙しながら、結局はそうした枠組みで巡礼をとらえることを拒否する。評者はそうした著者の基本姿勢を支持したこと、自ら歩いてみることに、自らバスツアーの一員となってみること、そうした積み重ねからしか、この閉塞状況は突破できないだろうからである。

注

(1) 両報告とも、評者が勤務する大学に提出された卒業論文および修士論文によったものである。

早川紀代秀・川村邦光著

『私にとつてオウムとは何だったのか』

ポプラ社 二〇〇五年三月二五日刊
四六判 三三九頁 一六〇〇円十税

島田裕巳

本書は、オウム真理教の幹部で、教団の建設省大臣の地位にあった早川紀代秀がつづった手記と、早川の裁判において弁護側証人として証言を行った宗教学者の川村邦光によるオウム真理教の事件、ならびに早川が数々の凶悪事件に関与するまでの経緯についての分析の二つから構成されている。前者が本全体の三分の二を占め、残りの三分の一が後者にあてられている。

オウム真理教の幹部のなかで、一審ならびに控訴審において死刑、ならびに無期懲役の判決を下された者は、教祖である麻原彰晃を含め十八名にのぼる。なかには、岡崎一明のように、最高裁において死刑判決が確定した者もある。そのうち、これまでまとまった手記を発表しているのは、医師で教団の治療省大臣をつとめ、地下鉄サリン事件ではサリン散布の実行犯となつた林郁夫だけである。林の場合、判決は無期懲役であり（現在服役中）、死刑判決を受けた教団幹部の手記は今回がはじめてということになる。

とくに早川は、一連の事件の発端となる一九八八年に起きた

書評と紹介

信者の事故死とその隠蔽工作に関与したのを皮切りに、田口修二リンチ殺害事件、坂本堤弁護士一家殺害事件に実行犯として加わっている。また、オウム真理教がソビエト連邦崩壊直後のロシアに進出した際には、その先頭に立って、さまざまなコネクション作りを奔走した。早川は一連の事件についてその詳細を知りうる立場にあり、その点で彼が手記を執筆したことには大きな意義がある。自己の解脱を求めて教団に出家した人間が、なぜ数々の陰惨な殺人事件を引き起こさなければならなかったのか。その原因と、オウム真理教が築こうとした宗教世界の関連を明らかにする上でも、早川が証言することは極めて重要である。

本書の具体的な内容についてふれる前に、本書が成立するまでの経緯をまとめておく必要がある。

川村は、二〇〇三年九月、早川の控訴審を担当し、川村とは大学時代から旧知の間柄であった弁護士黒田純吉から証人として法廷で証言するよう依頼された。川村によれば、この依頼を引き受ける上で、自分よりもふさわしい人間がいるのではないかと「少しためらいがあった」が、けっきょく証言を引き受けたのは、「これまで宗教研究をしてきた者の責務だと少なからず思ったから」だという。川村は、地下鉄サリン事件以前の一九九一年、『世界宗教大事典』（平凡社）の「新宗教の流れ」という項目のなかでオウム真理教についてふれたことがあり、サリン事件後には、「カリスマと『邪宗』の行方」（『状況』一九九五年六月号）と「宗教の闇をめぐって——ヴァジラヤーナ

への道程」（『別冊仏教』八号、一九九六年）という二篇の論文を執筆している（二篇とも『民俗空間の近代』状況出版、一九九六年所収）。

川村が、証言を引き受けた理由としてもう一つあげているのが、早川との同時代性である。川村は一九五〇年の生まれで、早川は一つ上の一九四九年生まれである。この時代に生を受けた人間が大学に進学した際には、大学は全共闘運動に席捲されていた。川村は、その点について、「六十年代末から七〇年代にかけての社会的・文化的な状況は、早川にも私にも大きな影響を及ぼし、その体験はいわば時代的な刻印となって、七〇年代以降も生き続けていたことはかなり共通している」と述べている。

川村は、法廷で証言を行った後、二〇〇三年四月二日と同年十月二十九日の二度にわたってオウム真理教の問題についての研究会を行い、自身、最初の研究会で「ハルマゲンドンを戦う、ヴァジラヤーナの戦士たち」という報告を行っている。この報告は、『文化／批評』春季号（『文化／批評』編集委員会、二〇〇五年三月）に「献身、あるいは自己犠牲の果てに——オウム真理教の信仰と実践とは」としてまとめられ、掲載されている。川村は、この論文のなかで早川に対する問いかけを行っており、それに対する早川の応答「献身、あるいは自己犠牲の果てに」を読んで「もあわせて収められている。本書は、この研究会での議論と、早川との意見交換がもとになっている。

早川は、その手記「消えない足跡——オウムと私の軌跡」の

なかで、自らの生い立ちからはじめ、大学時代に全共闘運動がキャンパスを席捲するなかで社会変革よりも心の問題に関心をもちたことにふれ、その関心が社会人になってから精神世界の方向にむかっていたと述べている。早川は、麻原の最初の著作である『超能力「秘密の開発法」』（大和出版）と出会い、オウム真理教の前身となる「オウム神仙の会」に入会して、ヨウガの修行をはじめ、大阪支部で活動するようになる。出家したのは一九八七年十一月で、支部活動を続けるとともに、翌年八月に静岡県富士宮市に建設される富士山総本部道場の用地取得にかかわり、建設班のリーダー的な存在として、道場建設の先頭に立った。一方で早川は、オウム真理教の教義と修行の体系にふれ、彼自身が修行のなかでどのような体験をしたかを説明していく。そして、オウム真理教の教団としての特徴にふれ、グルとしての麻原に対する彼の見方がどのように変化していったかということと、麻原自身の変化についてもふれている。

早川の手記のなかで、もっとも注目されるのが、「四 オウム真理教事件とヴァジラヤーナの教え」の部分である。そこでは、一連の事件の発端となった信者の事故死とその隠蔽工作に彼自身がどのように関与したかからはじまって、田口事件や坂本事件に関与した経緯、さらには、二つのサリン事件に結びつく武装化のプロセスと、そのなかでの早川の影響、武装化とも結びつくロシアでのさまざまな工作活動の実態、そして、早川自身のサリン事件とのかかわりがつづられている。

評者は、拙著『オウム なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』（トランスビュー、二〇〇一年七月）のなかで、事故死の

隠蔽が田口事件を誘発し、さらには坂本事件を生んでいった過程について分析を加えたが、なぜ事故死を隠蔽してしまったのか、早川は、麻原から、事故が公になったら救済計画が遅れる、また事故死した信者のために一刻も早くポアしなければならぬと言われ、それに反対できなかつたのは、「すでにこのころ、グル麻原の意思というものは、絶対的なものだった」と説明している。

事故死の隠蔽は殺人行為ではないが、田口事件の場合には、明らかにリンチによる殺人であり、早川は、その際にはじめて殺人に手を染めたことになる。彼は、それが麻原への帰依の心が強いときで、自らの行為の選択についても麻原が握っている、自身ではどうしようもなかつたものの、田口を殺害するのはいやだったと告白している。そのため、信者の事故死を隠蔽したという秘密をもつたまま脱会しようとしている田口をなんとか翻意させようとしたことを強調している。ただし早川は、殺人の具体的な行為についてはまったくふれず、それがグルの慈悲によるポア（殺害）という慈悲殺人の最初であったと言っている。殺害に関与したことによる心の動揺についてふれている。そして、自らが殺人という溝を越えてしまった理由については、「人は、強制されたものではなく、自らが認める『権威』というものには、自分が思っている以上に、ことのほか弱く、その『権威』が提示する『正義』の名のもとには『殺人』といえども簡単に犯してしまうのではないかと、今でも思います」と分析している。

坂本事件にかんしても、早川の記述の仕方は田口事件の場合

書評と紹介

と共通で、そこに至るまでの経緯については詳しく述べているものの、具体的な殺害の方法にはふれず、早川自身がそのなかでどういった役割を果たしたかについては語ろうとはしていない。ただ、メンバー六人によって坂本夫妻とまだ赤ん坊だった子どもを殺害してしまったと、事実を述べているだけである。そして、当時の麻原の心のなかを推測し、自分たちが殺害に参与してしまった理由については、「この時私達は、自分達のグルは世界を救う救世主であり、ポア（殺害）という手段を使っても、救済を成功させる偉大なグルであるという、グル幻想にどっぷり浸っていたのですから」と述べるにとどまっている。

早川は、その後に、オウム真理教の教団による武装化やロシアへの進出のなかで、彼自身がどのような役割を担ったかについて説明を行っているものの、その説明は詳細な点にまでは及んでおらず、いったい彼がそうした教団の企てのなかで何をめざしていたのかは、必ずしも明らかになっていない。また、早川が書いたメモには、核兵器についての記述があったとも伝えられているが、そうした点については何も語っていない。

早川は、手記の最後の部分となる「五 獄中で」のなかで、逮捕後、東京拘置所に拘留されるなかで、麻原に対する疑念が広がってきたことに言及している。疑念が広がるきっかけになったのは、早川が逮捕された直接の罪状が建造物侵入であったにもかかわらず、麻原がそれを武器等製造法違反と誤って認識していたことなど、グルの現状認識が間違っていることを知ったからだという。さらに、麻原が、遠藤誠弁護士と面会した

際、「お釈迦様が先生にお頼みしろと言われましてね」と言って弁護士を依頼したにもかかわらず、遠藤誠弁護士から断られたと聞き、麻原の霊性の根幹にかかわる部分に疑念が生じたとも述べている。

最初にも述べたように、早川はオウム真理教の教団のなかで極めて重要な位置を占めており、坂本事件に参与した点でも、その発言は注目される。ただ、すでに彼は、自らや麻原の法廷で証言を行っており、基本的に今回の手記は、それを大きく越えるものではない。早川の法廷での主な証言は、降旗賢一『オウム法廷』全十三巻（朝日文庫、一九九八年二月〜二〇〇四年四月）に収録されている。

早川は、なぜ自らが犯行に及んだかについては、当時の自分はグルである麻原を絶対的な存在として信じており、そのグルの命令に逆らうことができなかつたからだとして説明している。麻原を信じていたときの早川は、麻原の命じる殺人は慈悲殺人で、救済に結びつくものだとして信じていたというのである。こうした説明の仕方は、基本的に林郁夫の場合と共通する（『オウムと私』文藝春秋、一九九八年九月）。早川も、信仰によって犯行に及んだとしか説明できないのである。

それだけ、信仰のもつ力、その呪縛は強かったということなのかもしれないが、犯行の動機を信仰に求めてしまえば、そこで思考は停止してしまい、それ以上の解明には結びつかない。また、殺人という行為を実行するにあたっての自己の責任の部分がどこにあるかについても、それを明らかにすることには結びついていかない。果たしてそれは殺人を犯した者として真摯

に反省していると言えるのだろうか。彼は、事件を直視しているのだろうか。どうしても、そうした疑問が残ってしまうのである。

早川の手記が、かなり中途半端なものに終わり、少なくともオウム真理教の事件の解明に十分な貢献をなしえなかった原因の一端は、早川と証言や文章を通して対話を行った共著者、川村の側にもあるのではないだろうか。

本書が刊行されるまでの経緯を見ていく限り、川村は宗教研究者として誠実な姿勢を示している。オウム真理教の問題について、それを正面から論じようとする研究者が少ないなかで、事件からかなりの年月が経ったとは言え、新たな問題提起を行い、事件に深くかかわった早川と対話し、彼に手記を残させたことは評価されるべきである。

しかし、川村によるオウム真理教の事件全体についての分析にも、早川との対話の方法にも、大きな問題点があるのではないだろうか。

まず、事件全体についての分析だが、これまで行われてきた既存の研究と比較して、新たな方向性を示唆しているか、その点は必ずしも明確ではない。たとえば、オウム真理教における「戦士」という考え方については、これまで多くの指摘がなされてきた。あるいは、「マホームドラー」のことについて、評者は『オウム』のなかで詳細に論じている。川村は、既存の研究についていっさい言及しておらず、彼独自の見解なのか、それとも既存の研究に依拠した見解なのか、判断を下せなくなっている。

しかし、それ以上に問題なのは、早川に対する問いかけの方法と内容の部分である。本書では、川村が早川に対してどのような問いかけを行ったかは具体的に示されていないが、『文化／批評』に収められた「献身、あるいは自己犠牲の果てに」においては、そのなかではどう問いかけたのかが示されている。たとえば、問三は、「会社をやめ、財産を布施して、出家へといったった要因・動機、また家族関係とともに躊躇・葛藤はどうだったのか、出家してオウムのなかで生活していくことに不安はなかったのか。当時、社会／現世、また現世否定をどのように考えていたのか」となっている。

こうした川村の問いかけは、早川の信仰歴を追い、彼がどのような過程を経て、グルである麻原に対する信仰を獲得していったのかを明らかにしていくことに重点がおかれている。それは、宗教研究者が、信仰者の信仰世界の形成過程を明らかにしていく際に使う一般的な手法と共通している。川村としては、早川の信仰歴を追うことで、そのなかから彼がさまざまな事件に関与した動機を明らかにしようとしているのである。早川が殺人を犯した動機については、直接問いかけを行っていない。武装化との関与などについても、その意味や動機を問うような問いを発してはいないのである。

こうした事柄は非常に難しい問題であり、問いかけを行う人間と、それに答える人間との間に、十分な信頼関係が成立していなければならぬのであろう。本書を作り上げるなかでは、それだけの信頼関係を築けなかったということかもしれない。しかし、もっとも重要なことは、自らの解脱や精神的な向上を

書評と紹介

めざしてオウム真理教とかかわった人間が、なぜ無差別大量殺人にまで発展する一連の事件を引き起こしてしまったのかという点であるはずだ。その点にメスを入れなければ、たとえ当事者の手記であっても意味がない。川村としては、早川がもっとも答えにくい部分について迫っていく責務があったのではないだろうか。その点に対する問いかけを行っていない点から考えると、あえてその責務から逃げていっているようにも見えてしまうのである。

川村は、「あとがき」のなかで、「早川は麻原への絶対帰依を決定的に一扫し、麻原の影響から完璧に離脱することができるようになったと考えられる」と述べている。この川村の判断も、評者にはあまりに性急すぎるものに思えてならない。オウム真理教にかぎらず、一度宗教の世界に深く入り込んでいった人間が、たとえ脱会や信仰の放棄を宣言したとしても、その宗教世界から抜け出すことは容易なことではない。完全に抜け出るまでには相当の時間が必要だし、長期にわたる葛藤を経なければならぬ。結局のところは、生涯をかけても、その影響を一扫できないことも珍しくはない。

しかも、早川の場合、麻原を否定するに至ったのは、拘置所において、宗教関係の本を大量に読み、瞑想などの修行を続けた結果である。早川は、「その結果、一、二年後にはどんな時でも瞑想をしたら、すぐに頭頂から冷たい甘露（歓喜）があふれ、この状態は年々強烈なものに成熟していきました」と述べている。早川は、オウム真理教にいたときと同種の修行を続けている。彼が麻原から離脱したと言うのは、グルがいなくて

も、独自に修行することで、高い宗教的境地に達することができようになったということなのではないだろうか。ひたすら修行にいそむ早川の姿は、オウム真理教の時代と連続している。グルである麻原に対する絶対帰依の感情は、こうした瞑想修行と根底において深い結びつきをもっているのではないだろうか。この点でも、早川が、麻原の世界、オウム真理教の世界から完璧に離脱しているようには、とても思えないのである。